

知事随想



愛知県知事

神田真秋

「芸術立県愛知」の実現に向けて

「国際芸術祭 あいちトリエンナーレ二〇一〇」の開催

もう随分前のことである。どなたの言葉であったか今ではすっかり忘れてしまったし、文章の正確な表現も覚えていないが、こんな刺激的な言葉に出会った。「行政が後世に残せるものは、究極のところ文化しかない。」

この言葉をどう受けとめたいのだろうか。人によってさまざまであろうが行政に身を置く私の心には強く響き、とても重いメッセージに感じられた。

なぜ文化芸術は後世に残り得るのか。

それは文化芸術が、その時代や社会が求める人間の根源的営為そのものであり、時代を経て将来へ脈々と受け継がれてゆく貴重な財産であるからにちがいない。

真にその時代や社会が求めるものは、長い時空を超えて光彩を放ち生き続ける可能性を持っている。それだけにじっくりと時代の背景と向き合い、長いタームで文化芸術のあり方に取り組まなければならないことだと思う。

行政が文化芸術に積極的にかかわっていく理由も、文化芸術が持つ人間の生活とのかかわりの深さゆえではないだろうか。…いずれにしても私にとってまさに目から鱗の言葉であった。

二〇〇五年（平成十七年）に愛知県で開催した日本国際博覧会「愛・地球博」が大成功をおさめた。「環境」をテーマとした博覧会によって国際的に認知されたこの地域を更に発展させ、将来へ向けて飛躍し、国際的な評価を得ていくためには何が必要か。このとき、冒頭の言葉を思い出した。愛知の文化芸術は、どのような潜在力と、発信力を持っているのだろうか、また世界に十分認知されているであろうか、との思いにとらわれた。

そこで私は愛知が後世に残し得る文化芸術づくりとして、国際芸術祭を開催しよう、と強く認識したのであった。

その愛知初の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ二〇一〇」が、いよいよ今年八月二十一日（土）から十月三十一日（日）の七十二日間、開催されることとなった。

「あいちトリエンナーレ二〇一〇」は、「都市の祝祭[Arts and Cities]」をテーマとして、全国有数の大型複合文化施設である愛知芸術文化センターをメイン会場に、現代美術の国際展や舞台芸術をとおして、世界最先端の現代アートを紹介する国内最大級の国際芸術祭である。

現代美術の国際展には、国内外七十五組のアーティストが参加し、この愛知でしか見られない新作も多く展示される。九月二十四日、二十五日には、パリ在住の電子音楽の作曲家、アーティストの池田亮司さんが、名古屋城で、サーチライトによる強烈な白色光と、スピーカーから出力される音の波を組み合わせたインスタレーションを実施する。このインスタレーションは、二〇〇八年にアムステルダムとパリで、今年六月にはバルセロナで行われ、好評を博したものである。さらに、ダンス、演劇、音楽、美術等、ジャンルの垣根を超えた創作活動を展開している国内外二十一団体等のアーティストが、ホールでの先鋭的な公演やまちなかでのパフォーマンスを行う。

開催期間中、名古屋の中心部のまちなかに現代アートの祭りが出現し、非日常的な思いがけない体験に出会い、わくわくする高揚感に満ちあふれることを期待している。また、こうした祝祭感をもしたため、名古屋栄を中心に活動する人気アイドルグループ「SKE48」にも応援サポーターとして一役かっていたところである。

文化芸術というのは常にその時代の時代を映しているもの、そして、半歩一歩前を進んでいるものと言われている。現代アートは、少なからず難しさが伴うが、まずは見ることに、経験することが大切であり、その中から新しい発見や感動が生まれてくることと思う。あいちトリエンナーレが、そうした感動や交流の舞台となり、今後三年ごとに継続開催することで、愛知に根ざす文化芸術として後世に受け継がれ、創造力に満ちた魅力ある地域が形成されていく。これこそが、世界の文化芸術の発展に貢献し、人々の日常生活に文化芸術が浸透する「芸術立県愛知」の一つの姿であろうと信じている。

ところで、愛知には、すばらしい食文化や文化財があることはご存知だろうか。みそカツ、みそ煮込みうどん、ひつまぶしを始めとした「なごやめし」、金シャチの鎮座する名古屋城や国宝の犬山城、三種の神器の一つである「草薙の剣」を祀る熱田神宮等、グルメ・観光スポーツが豊富にある。読者の皆様も、是非愛知を訪れていただき、世界に文化芸術を創造発信する、愛知・名古屋の壮大なチャレンジ「あいちトリエンナーレ二〇一〇」をご覧ください。

